

これまで植物に関する専門家の一人と遇されて話題を提供してきたので、植物に関して素人の目で何か申したいと申したら、読者には奇異に思われるかもしれない。しかし、次に述べるような理由を申せば、その意とするところを理解していただけるのではと思う。それは、筆者が若年にヤナギランと出会い、その後いくつかの場面で出会い、それらをつなぎ合わせたものである。いわば、予見のない直感的視覚と専門的な知見とは連続性が十分ありうるということをお願いするのである。

ヤナギラン

ヤナギランといってもヤナギではなく、その葉がヤナギの葉に似ているからであり、また、ランではないことはご存知の方も多であろう(図-1)。ヤナギラン(*Epilobium angustifolium*)はアカバナ科に属し、日本の山地を代表する植物の一つである。筆者が最初に出会ったのは小学5年生の晩夏で、八ヶ岳の雄峰の一つ阿弥陀岳へ登ったときである。筆者の父親は当時遭難者救助に関わっており、阿弥陀岳南稜で亡くなった二人の青年の慰霊碑を山頂に建てることになり、地元の山岳会の搜索隊



図-1 ヤナギラン
白馬岳にて田田 仁博士(東京大学名誉教授)撮影

代表としてそれに関わったので、筆者もそれに同行した。御小屋尾根を登っていく登山道はかなり勾配のきつい道であるが、その途中でやや緩やかになる標高2,000mを少し超える地点の南面する斜面が開けていた。そこに、一面に群生しているヤナギランの群落を見たときに深く感動したが、それは強い印象として残り、その名前も図鑑で知った。その後、本州北部では、およそこの標高付近の高原で見られることを経験している。

次に、強い印象に残ったのは、29歳になってからであるが、その頃までには学位を得て、大学の教養学部勤務であった。筆者の研究に興味を持って下さったマックス・プランク生物学研究所のメルヒヤース(G. Melchers)教授がフンボルト留学生に誘って下さったので応募したところ、すぐに採択になり、フンボルト財団奨励研究員としてドイツへ向かった。その頃は北極圏経由が普通であり、羽田発のルフトハンザ機は、まず、アラスカのアンカレッジ空港に向かった。飛行機が着陸した時に、そこには日本でよく見慣れたヤナギランらしき植物が見られたので、一瞬同一かどうか疑った。全く平地に生えており、時期的に種子も形成されており、一見スキ状にも見えた。その先、ヨーロッパへ到達すると、ドイツでもイギリスでも至るところ平地で、普通に見ることができた。これは一体どういうことであろうかという素朴な疑問が浮かんだが、どうやらそれらは同一の種らしいことが図鑑で分かった。そこで、植物分布の本を開くと、それは北半球には広く分布しているとあり、その分布は新生代の地球の歴史と絡めて説明されていた。それでは、その他の植物ではどうであろうかという思いが浮かんだ。その時思いついたのはキツリフネであった。

キツリフネとツリフネソウ

筆者の育った場所は、八ヶ岳のふもとの標高970m付近であり、田園地帯が広がっていたが、1km余先の小学校へ続く通学路には日常的にツリフネソウ(*Impatiens textori*)が見られ、多くは川添に生育していた(図-2)。ただ、残念なこ



図-2 ツリフネソウの花
ネット情報による



図-3 キツリフネの花
ネット情報による

とに、最近の耕地改善事業でかつての小川はなくなり、今やツリフネソウも容易には見られない。ところが、少し山地に入って1,200mあたりになると、キツリフネ (*I. noli-tangere*) が見られることを経験的に知っていた (図-3)。これらの名前は、その花を舟に見立て、それが下がっていることによる。ところが、長じてヨーロッパに出かけるようになるとこのキツリフネとよく似た植物はあちこちに見かけることに気付いた。例えば、2010年の夏にはスイスのイタリア語圏のマジョレ湖畔のロカルノに数日滞在したが、周囲を歩くとキツリフネ様の植物は普通に見られ、まさにそれであることが分かった。どうやら、キツリフネも北半球にあまねく分布するらしいことを認識し、ヤナギランで経験したことは、キツリフネにも通じていることを知った。それに比べ、ツリフネソウはやや局所的で、東アジア圏に広がっている。これに対し、この仲間のハウセンカ (*I. balsamena*) は園芸植物として、しばしば庭に植えられているが、図鑑によるとインドあたりが原産で広く世界に広がっているとのことであった。2012年の秋には小さな集まりがあつて台湾国立大学を訪問したが、エクスカージョンで台北市の水源地である標高400m～1,400mの山地のフーシャン(福山)植物園への途次、かなりはびこっていることを知った。

この植物グループで、経験的に知ったことは、いずれの植物も熟した種子を取めている莢にちょっと触ると、たちまち莢がはじけて種子が飛散することである。その属名 *Impatiens* はラテン語で、まさにたまったストレスが触るとはじけることを意味し、英語の非寛容・不機嫌もそれに由来していることを知った。また、英語で Touch-me-not といい、ドイツ語の Rühr-mich-nicht-an も同意であることを知った。更に、キツリフネの種小名 *noli-tangere* は、ラテン語そのままの「触らないで」であることを知ったときは、学名命名の秘密の一つを知った思いをした。

いずれにせよ、北半球の植物には共通性があり、いくつかの同一種はあまねく広がっていることを知った。その原因は新生代後半以降の地球環境のもたらしたものであり、氷河期

が大きく関わっているのである。日本列島は氷河の影響を受けることが比較的少なかったので、密かに筆者の思っていることは、日本の植物相は極めて豊かで、ヨーロッパへ行っても北米へ行っても日本の植物を知っているとあまり不自由しないというのが感慨である。

ペルリの黒船艦隊

「泰平の眠りを覚ます上喜撰たった二杯で夜も眠れず」と狂歌で揶揄されたペルリの黒船艦隊の来訪は、開国と明治維新への道を開くことになったことは良く知られている。しかし、その艦隊が動植物の採集を行っていたことはそれほど知られていることではないであろう。植物採集の提案者はグレー (Asa Gray) であり、彼の目的は北米の東部とアジア東部の植生の類似性を確かめることであった。マクロで見ると両者は類似していることは、多くの植物群で知られているが、黒船艦隊の採集品の中にはミズバショウ (*Lysichiton camtschatcense*) があるが、北米にはこれに相当するより臭いの強いスカンク・キャベツ (*L. americanum*) があるのである。この臭いは、特別な温度上昇機構によって、雪解けの時期に花を開く植物が交配に関わる昆虫を集めるためと理解されている。このグレーは、ハーバート大学で北米の植物種の実態を解明する中で、このような見解に達したのであり、彼はダーウィンが進化論を発表するといち早くこれに賛成したが、両大陸の類似性もその根拠としている。ということは、北米の東岸地域の植物は日本でもよく生育するということであり、今日日本で広く植えられているユリノキ、プラタナスはその例である。一方、その逆も真であることは、ハーバード大学アーノルド樹木園での日本固有のカツラやヒロハカツラがよく生育していることを2015年秋に経験した。乾燥しているせいか、マルトールに由来するあの甘い香りは一層強烈であった。グレーはまた、北米の東と西では植生が異なり、その原因は西海岸では冬に雨が多いが、この気候のためであると述べている。

この様に見てくると、日常見かける日本在来植物とマクロな視点では、北半球に広く見られる植生とは密接にかかわっていることが見て取れるということが伝わればと思う。